

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

シャボン玉～一人一人の思いに添った援助～／墨田区立立花幼稚園（東京都）

子どもたちにとって、魅力的な遊びの一つであるシャボン玉遊び。どのような環境の工夫をされていますか？

今回は、シャボン玉遊びに興味をもった子どもたちが、自分なりに試したり、新たな発見をしたりする姿をご紹介します。

同じ遊びをしても、試したいことや追求したいことなど一人一人によって違う思いを保育者は理解し関わっています。また、「科学する心」を育むために、子どもの実態に添って環境を再構成していくことの大切さを読み取ることができます。



「くっ付くのが好きみたい・風が連れていっちゃった」／4歳児

6月、園生活に慣れ、いろいろな遊びや活動に意欲的に取り組む子どもが多くなった。子どもたちにとって新しいものとの出会いは魅力的で、「それ何？」「やってみたい！」と期待をもって興味津々であった。保育者は、いろいろな遊びを通して、少しずつ遊びの楽しさの経験を広げられるよう、園での新たな出会いとして、シャボン玉を環境の中に用意することにした。

✦ 友達と一緒に

- 子どもたちは、シャボン玉に繰り返し取り組む中で、いろいろな遊び方を試している。大きく出すにはゆっくり息を吹く、いっぱい出すには息を早く吹くなど、コツを掴んで繰り返し楽しんでいる。
- AちゃんとBちゃんが保育者に、「先生、見て！」と言い、2人でストローの口を合わせてシャボン玉を出す。2人のシャボン玉がつながって大きく膨らむと「ね！すごいでしょ」と言う。
- 保育者は、「本当だ！いっぱい膨らんだね」と言うと、その様子を見ていたCちゃんもストローの先を合わせて一緒にやってみようとする。AちゃんとBちゃんはCちゃんに、「いい？そーっとね！」と言い、3人でやってみる。
- その動きは周りの子どもたちにも伝わり、友達と一緒に膨らませることを楽しむ子どもたちが増える。



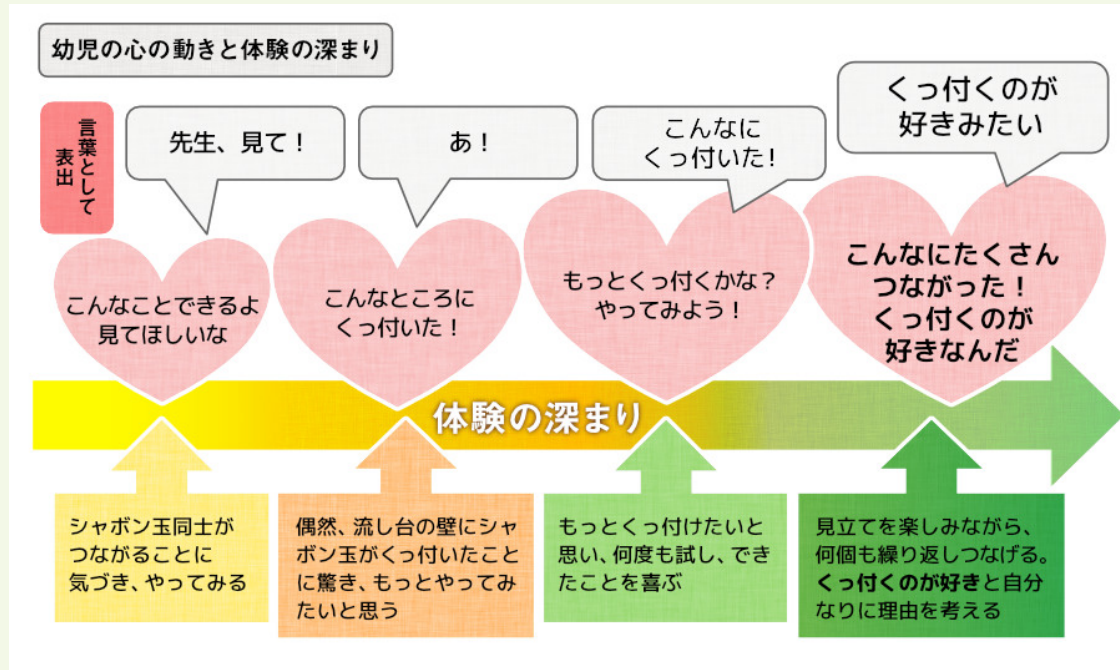
✦ 物にくっ付くことに気づく

- 雨が降り続く日、室内での遊びが中心となっていたが、「先生、お庭に行きたい」と子どもたちが言う。
- 保育者は、「濡れると風邪引いちゃうから、屋根のある所なら遊べるね」と言い、一緒に園庭に出る。
- 屋根の下で、子どもたちはシャボン玉を手にとって吹き始める。Dちゃんの吹いたシャボン玉が、偶然、雨で濡れた流し台の壁に付いた。Dちゃんは、「アッ！」と言い、流し台に向かって何度もシャボン玉を吹いてみる。そして、友達や保育者に向かって、「こんなにくっ付いた！」と言う。それを見ていた子どもたちはいろいろな所や物に向かってシャボン玉を吹き始める。



✦ つなげることを楽しむ

- Eちゃんは、近くにあったベンチの上に並べるようにシャボン玉を吹いていく。シャボン玉同士がつながる様子を見て、「おしり」「イモムシ」など見立てを楽しんでいる。たくさんつながった様子を見て、保育者が、「すごい、そんなにいっぱいつながったの?」と言葉を掛けると、「くっ付くのが好きみたい」と言う。



図「幼児の心の動きと体験の深まり」

✦ シャボン玉の中にシャボン玉

- 連日、シャボン玉の遊びが続いている。物にくっ付けることを楽しむ姿があったため、保育者は環境の中に机を置く。毎日シャボン玉を楽しんでいるFちゃんが早速、机を見つけて、机の上でシャボン玉を膨らませる。
- 息を吹き込むことでドーム型に大きくなっていくことを面白がり、「もっと大きくする」と繰り返している。シャボン玉のドームの中にストローを差し込み、息を吹き込むと、ドームの中にシャボン玉ができる。すぐに机の上にくっ付いてしまったが、Fちゃんは、「わ!」と言って保育者を見る。保育者が「うん、見た!」と答えると、「シャボン玉の中にシャボン玉」と言って笑い、その後も何度もやってみようと繰り返す。



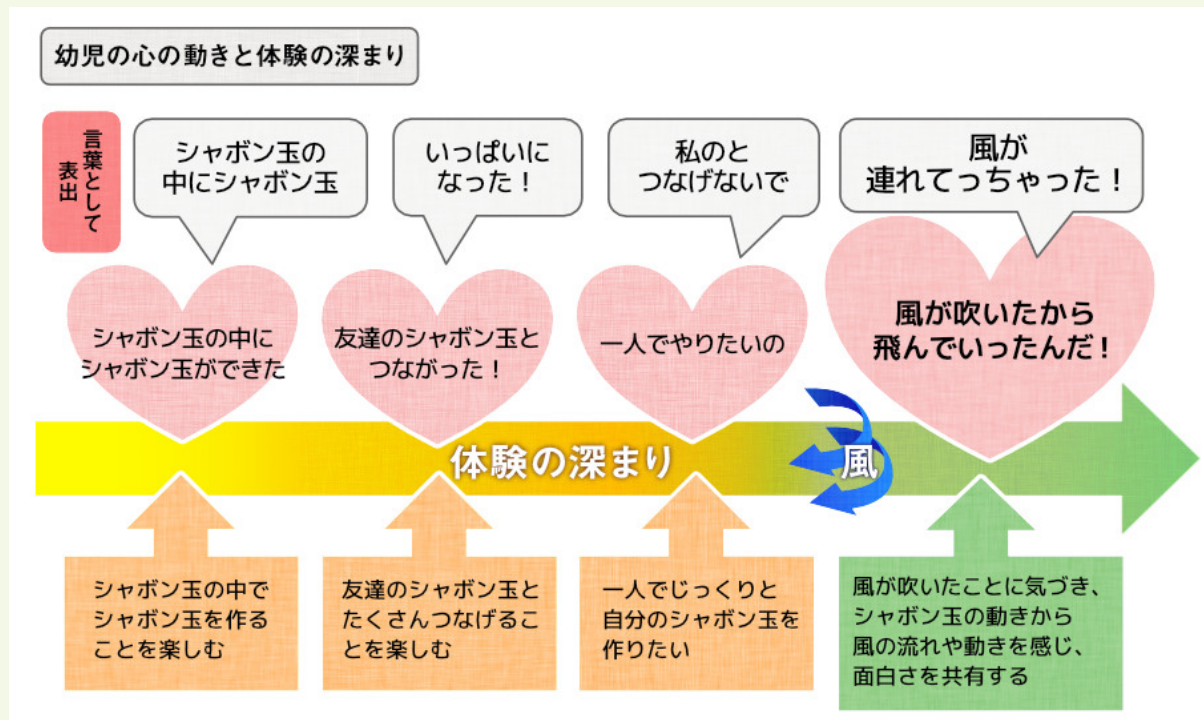
✦ 面白さが伝わる、広がる、つながる

- Fちゃんの様子を見て、「私もやりたい」「僕も」と他の子どもたちが集まって来る。それぞれが自分のボトルを持ち、机に向かってシャボン玉を吹く。吹いたシャボン玉が机にくっ付いたり、友達のシャボン玉とつながったりすると、「いっぱいになった!」と喜んだり、反対に「わたしのとつなげないで」とつなげられるのを嫌がったりする子どももいる。
- 保育者は、一人でじっくり取り組みたい子どもには「こっちだと広いよ」と言葉を掛けたり、新しく机やベンチを出したりしながらそれぞれの子どもが自分のしたいことに集中して取り組めるようにする。



✦ 風が吹く

- みんなで机を囲みながらシャボン玉を吹いていると、一瞬、強い風が吹く。すると、机の上にくっついていていたシャボン玉が数個、風に乗って舞い上がる。子どもたちは、「あ！」と視線を上げ、「風が、連れてっちゃった！」と言いながら飛んでいくシャボン玉を追い掛けたり、その様子を見たりして笑い合う。



図「幼児の心の動きと体験の深まり」

✦ 考察

- シャボン玉遊びに繰り返し取り組む中、場や状況や自然事象などが変わっていくことで、同じ遊びでも子どもたちの遊び方も変化していった。また、シャボン玉の中にシャボン玉を作ることに面白さを感じる子ども、何度も繰り返す子ども、友達と一緒にたくさんつなげたい子ども、一人でじっくりと試したり工夫したりしたい子どもなど、楽しみ方はそれぞれ違うことが見取れた。保育者がそれぞれの子どもの体験や楽しみ方をよく理解して援助を行うことの重要性を改めて感じることができた。
- それまでは、別の動きをしていた子どもたちが、「風が連れてっちゃった」という言葉で、一瞬だったが、その場のみんなの楽しさがふと重なった。このように、それぞれが自分の楽しみ方をしている中で、一人一人の楽しさがつながったり、新しい面白さを発見したりしながら、体験は深まっていくのだろうと思われる。保育者はみんなに共通の楽しさを経験させることを急がずに、一人一人の遊びの充実を第一に図っていくことが重要であると考えられる。
- 体験の深まりのためには、一人一人が自分のしたいことにじっくりと取り組める十分な時間や物の数、場の広さが必要であり、そこには一緒に遊びながら新しい面白さを共に見つけていく友達の存在が重要だった。保育者は子どもたちが今、何に注目し、どのように楽しんでいるのかを丁寧に見取って言葉を掛けたり、環境を再構成したりして、子どもたちの体験の深まりを支える援助が求められる。